

演題 8. 口腔インプラントの統計的観察

○横田 光正, 伊藤 創造, 宮手 浩樹
塩山 司, 石橋 寛二

岩手医科大学歯学部附属病院口腔インプラント
室

インプラント診療は、1992年より各種委員会で検討された後、1994年から岩手医科大学歯学部附属病院内に口腔インプラント室が設置された。1994年5月の公開手術以来、相談のため受診した患者は50名以上おり、積極的であった42名が登録された。経年的推移によると1997年より相談者が増加し、環境が整った1999年より治療患者が増加している。使用したインプラントは、ブローネマルク・システム (Nobel biocare 社製) であり、2001年12月現在まで19名が治療を受け、16名が準備中である。19名の年齢は21歳から59歳 (平均46.2歳) で、男性5例、女性14例であった。職業は教師、会社役員、美容院経営者など人前で話す機会の多い職種に希望者が多かった。インプラント埋入本数は1本から16本 (平均6.5本) が埋入された。1次手術後の経過期間は、最長7年6ヵ月、最短1ヵ月 (平均2年4ヵ月) であった。症例は骨欠損が顕著な例も多く、全身麻酔下に腸骨移植を4例5側 (サイナスリフト2側) に行った。また、Resolute (2例) や Tissue Guide (1例) などを使用したGBRなどがあった。手術時、静脈内鎮静法の併用を希望する症例 (9例10回) もあり、全症例中10例が短期入院した。使用した本数は上顎に54本 (前歯部26.0%)、下顎に69本 (臼歯部50.4%) が埋入された。Sleeping が3本 (近接埋入を含む)、粘膜骨膜弁壊死などによる non-integration が2本であった。現在、3例が2次手術待ちで、2次手術以後の成功率は92本中87本、上顎92.1%、下顎96.3%、平均94.6%であり、上部構造物が装着され良好に機能している。また、喫煙者や糖尿病の症例に粘膜骨膜弁の壊死が見られ、術前術後管理の重要性が示唆された。今後さらに症例が増加することが予想される。

演題 9. 3根を有する上顎第一小臼歯の一例

—マイクロフォーカスX線CTによる歯髓腔の形態—

○長門 里美, 小野寺政雄, 藤村 朗
中野 廣一*, 菊月 圭吾*, 野坂洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座
盛岡市開業*

矯正治療を目的として便宜抜去された3根を有する左側上顎第一小臼歯に遭遇したので、その形態の特徴および歯髓腔の形態をマイクロフォーカス・エックス線CTを用いて観察したので報告する。

入手した3根を有する左側上顎第一小臼歯は過去の報告と同様の形態で、歯冠に関しては、日本人平均値よりも幅径、厚径ともに若干大きめであった。歯冠外形に解剖学的異常は認められなかった。頬側根が完全に分岐しており、歯頸部においてはエナメル質根間突起が存在していた。出現率は0.1%未満から5%と様々な報告がなされているが日常臨床で遭遇することは非常に稀なケースであった。これらの報告では歯髓腔の形態に言及したものがなかったので、我々は、マイクロフォーカス・エックス線CT (SMX-225CT, Shimadzu Co.; 照射条件85kV・300 μ A) にて二次元スライス像を作製し、その画像を元に画像処理ソフト (IP Lab, ver. 3.4.5) にて閾値処理を行い、三次元再構築ソフト (Voxblast ver. 2.3.3) を用いて3根性上顎第一小臼歯の歯髓腔の三次元的形態をボリューム・レンダリング法により非破壊的に作製、観察し、歯冠外形との関連性を検討した。さらに2根性の上顎第一小臼歯、そして3根を有するという上で上顎第一大臼歯と比較、検討した。その結果、髓室角が頬舌に1つずつ存在することが確認できた。歯頸部歯髓腔の形態は明らかに2根性上顎第一小臼歯と類似していたが、髓室床は上顎第一大臼歯と類似しておりタウロドント型で、3根管口の中央部が最も高かった。しかし、根分岐部が歯根のほぼ中央に存在しており、髓室床もかなり根尖に寄っていた。また、舌側根管中央部に遠心方向にのびる側枝を確認することができた。

歯頸部においてエナメル質の根間突起が認められ、この部位ですでに歯根の分岐が始まっていること、髓室床の形態から、本上顎第一小臼歯は複根を有する大臼歯の歯根形成の過程を類推する一助となるものと考えられた。